

# 服装イメージと対人評価

堀内 雅子

群馬大学教育学部家政教育講座

(1999年9月8日受理)

## Relation between images wearing clothing and personality

Utako Horiuchi

*Department of Home Economics, Faculty of Education, Gunma University*

*Maebashi, Gunma 371-8510 Japan*

(Accepted September 8, 1999)

We got the information about the images got from the clothing and the feeling of the wearing persons through a questionnaire from 275 persons above 19 years old.

- 1) Only 13.7% of people answered that it is difficult to justify human personality or their activity from their wearing dress, and so, many peoples, especially momentary-type people rather than steady-type people, considered that it was easy to justify human personality from their clothing.
- 2) It became clear that the feeling of the clothing differed mostly by age, followed by living-style. There was little difference of the feeling between male and female.
- 3) The younger people or consumptive people have the tendency to admire the men with pierced earrings. Furthermore, people who are free from genderism also admire them similarly.
- 4) Overall, it became clear that clothing acts as non-verbal information. Although it is said that the latest period is the diversified period, it has not changed that people has tendency to evaluate human characters by clothing-style.

## 1 結 言

衣服が「第二の皮膚」と呼ばれていることでもわかるように、その着用目的の第一は保健衛生的機能であり、次いで社会的・儀礼的機能、個性・美意識の表現など審美的機能であると考えられていた。

しかし、衣服が多様化、個性化した現在、保健衛生的機能を重視する場は少なくなり、人々の意識は、それ以外に向けられることが多くなった。その結果、人は服装を通して相手の社会的地位や経済状態を推測し、さらに、その人個人の性格や考え方、生き方など内面的なものをも予測

するようになり、今や、衣服は「非言語情報」として無視しえないものとなった。

このように情報の一つになったとは言え、服装イメージのような非言語情報は、時には正確に伝わらないこともある。最近の事例としては、男性社員のピアスの例<sup>1)</sup>がある。これはピアスをしていた男性社員が、上司などから信用を受けにくかったり、実際より低い実力評価を受けていたという問題であるが、同様問題<sup>2), 3)</sup>は会社指定の制服を着用していた女性社員にも起こっている。このように、服装イメージによる印象は、見る側と見られる側の相互の関係から形成されるものであるが故、その評価も見る側のパーソナリティや生活スタイルの影響を受ける、と考えられる。

先行研究には、服装と性格の関連性やパーソナリティ特性との関連性を検討したものも多いが、生活スタイルとの関連を研究したものは少なく、不十分である<sup>4~6)</sup>。本研究においては、見る側の生活スタイルが服装イメージにどのように影響するのか、また、イメージのもちようによって相手に対する評価がどのように変化するのか、について調査・検討する。

## 2 方法

### 1 調査対象および期間

調査対象：群馬県および埼玉県に在住の19歳以上の学生および社会人で、その内訳は表1の通りである。

調査期間：1998年9月上旬から11月下旬

表1 調査対象者の年齢、性別割合

年代および性別		人数(人)	割合(%)
年 代	10代	38	14.0
	20代	112	41.3
	30代	46	17.0
	40代	44	16.2
	50代以上	31	11.4
	不明	4	-
性 別	男性	73	26.6
	女性	201	73.4
	不明	1	-

### 2 調査項目および調査方法

調査は質問紙によるアンケート調査である。調査項目は、若向きデザインのファッション写真に対する印象、社員の制服やピアスに対する考え方や印象、および、生活スタイルである。ファッション写真は、雑誌などから選んだものをイメージの異なる4つの服装スタイルに分類し、3つのデザインを1グループとして調査票にカラーコピーした。

### 3 分析方法

服装スタイルに対する印象を年代別、性別、生活スタイル別に検討した。なお、服装スタイルに対する質問は、「そう思う」から「そう思わない」の5段階評定に加え、「服装だけでは判断できない」という選択肢も設けた。5段階評定で得た回答は「そう思う」5点、「そう思わない」1点に得点化した後、性別、年代別、生活スタイル別でそれぞれ平均を求めた。なお、検定は単数回答で得た結果を基に  $X^2$ -検定を行った。また、生活スタイルについては、以下の方法でグループ化した。

〈調査対象者の生活スタイルによるグループ化〉

下記の17項目の生活スタイルについての問い全てに対し、「そう思う」から「そう思わない」の5択で回答を求め、その結果をもとに、クラスター分析を行った。1～5名の少人数クラスター(計17人)を除外し、上位3つのクラスターについて検討することとする。

- ①誰も持っていないものを持ちたい
- ②人に注目されるようなことがしたい
- ③新製品や流行のものは、すぐ買う方である
- ④交際範囲は広い方である
- ⑤よく外出する方である
- ⑥色々な体験をしてみたい
- ⑦物を買うときはよく比較してから買う
- ⑧将来に備えて堅実な生活を送りたい
- ⑨自分の都合より人のつきあいを大切にする
- ⑩何かを決めるときには前例や習慣に従う
- ⑪結婚をしても仕事を続けたい
- ⑫自分の主張は何があっても曲げない
- ⑬趣味にお金をかける方である
- ⑭ひとつのものを長く大切に使う方である
- ⑮将来にではなく、今を楽しく生きたい
- ⑯出世しなくてもいいからのんびり暮らしたい
- ⑰自分がリーダーになるよりは他の人に従って生きたい

クラスター特性を図1に示す。クラスター1は自己主張が強く、活動的であり、新しいものに興味を持ち、周りの意見や決まりにとらわれずに今を楽しむ傾向を示すことから「刹那型」クラスター(22名)とした。クラスター3は幅広い分野に興味を示し、ものごとをよく考え、将来に向けて計画的に生活しているタイプであるところから、このグループを「堅実型」(32名)クラスターとした。また、全てに平均的傾向を示すグループを「平均型」(181名)クラスターとした。

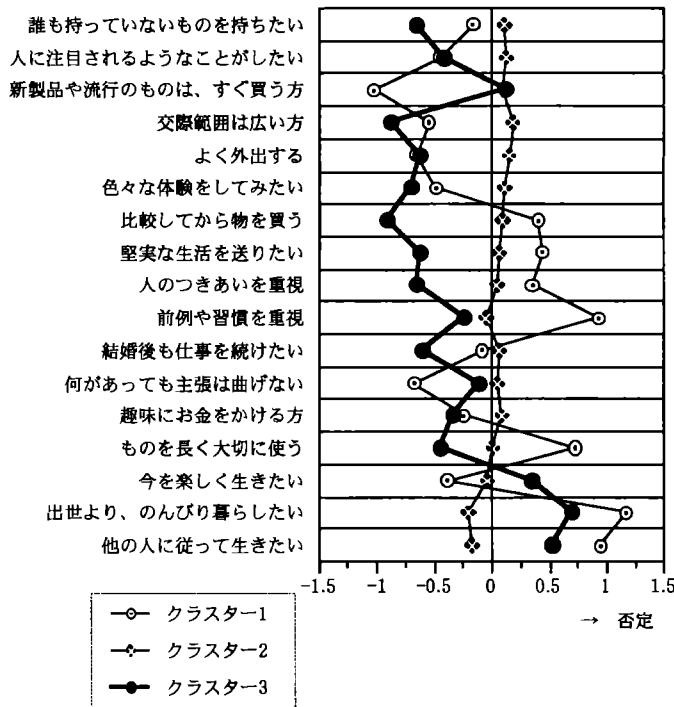


図1 クラスター別生活スタイルプロフィール

### 3 結果および考察

#### 1 服装が発する非言語情報

4 グループの服装スタイルに対し、服装から受ける印象18項目を質問した結果、「服装だけでは判断できない」と答えた人は、全体で13.7%であった。結果を図2に示す。「活動的である」「明るい」などのように服装スタイルによっては服装を基に判断できるか否かの程度にA~Dスタイル間で差が大きいものもあったが、概して内面を反映するイメージ項目で「服装だけでは判断できない」を選択する割合が高い傾向であった。

一方、上述した「服装だけでは判断できない」の選択率13.7%は、逆に、残りの8割以上の人は服装で相手の性格等を判断できると考えていることを示している。また、最も服装だけでは判断できないと考えられている「行動がルーズである」項目でさえ、選択率は25.8%で、7割以上の人は服装をただで、行動がルーズであるか否か判断できると考えていることから、服装スタイルはまさに非言語情報と言える。

なお、年齢別、生活スタイル別に「服装だけでは判断できない」の選択率をみると、年齢別では差はほとんどなかった。一方、生活スタイル別では利那型に比べ、堅実型の人の方が「服装だけでは判断できない」の選択率が高い。たとえば、Aスタイルでは、質問18項目中14項目で堅実

型の人の方が「服装だけでは判断できない」選択率が高くなっている。また、Bスタイルでは13項目、Cスタイルでは9項目、Dスタイルでは10項目で選択率が高く、堅実型の人の方が外観で内面などを判断することが少ないことがわかった。

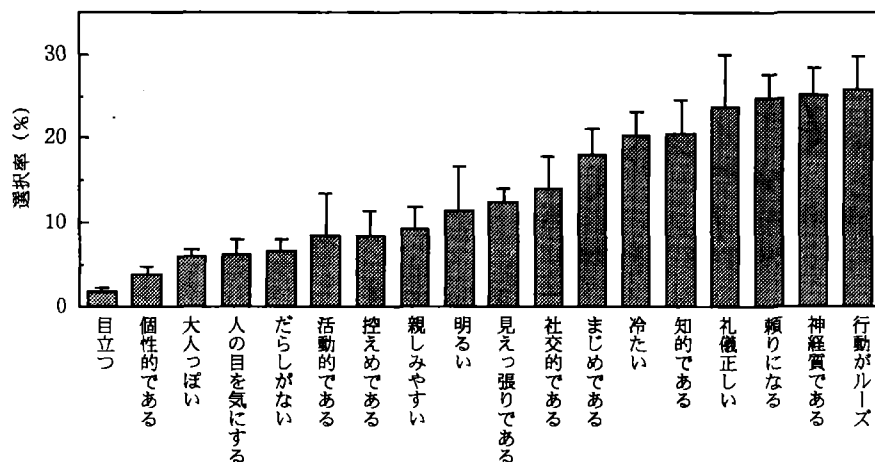


図2 A～Dの服装スタイルに対し「服装だけでは判断できない」とする割合

## 2 服装スタイル4グループの印象

服装から受ける印象について「そう思う」から「そう思わない」までの5段階で得た回答を得点化し、A～Dの服装スタイルの平均と比較した結果を、図3に示す。図中、平均を100とし、これを基に換算した服装スタイル得点を図示したが、いずれの図も最大目盛りは160を示し、数値が大きい方が、「そう思う」割合が高いことを意味する。なお、各グループとも平均±10%以内の換算値を示した項目は除いた。

Aグループは個性的で目立つがだらしない、行動がルーズで見えっ張りなど、マイナスの評価を受けている。これに反し、Bグループはまじめで頼りになるなど、プラス評価も高いが、明るさ、親しみやすさなどの点で問題を残しているスタイルである。C、Dグループは若者の服装としては平均的なイメージを持たれているが、Cグループの方がより好意的に受け入れられていることがわかる。

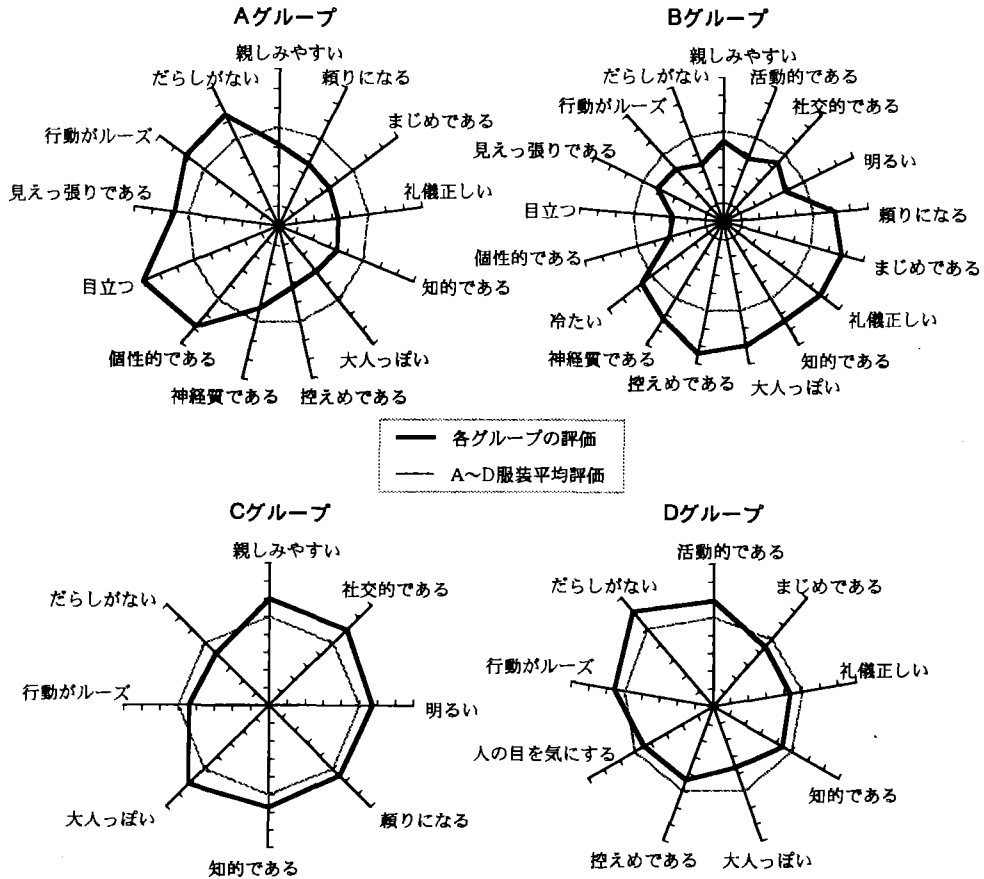


図3 服装スタイル別イメージに対する肯定度合比較

(A~D 服装スタイル評価平均を100とした時)

### 3 年代別、性別にみた服装スタイルの印象

年代別にみた服装スタイルの印象を図4に示す。これは上述のように5択回答を数値化したものであり、数値1は「そう思わない」、数値5は「そう思う」に相当する。図中、有意差の見られたものについては、マークを付した ( $X^2$ -検定、\*\* :  $P < 0.01$ 、\* :  $P < 0.05$ )。

Aグループの服装に対して、若い人は「頼りになる」「明るい」「個性的である」「社交的である」などで高い評価をし、他の年代の人より総じて好意的評価をしている。特に、この傾向が強く表れているのが「頼りになる」項目であり、全体としては「頼りになる」とは思いにくいスタイルであるにも関わらず、そう思う割合が比較的高かった。

10、20代の若い人の「頼りになる」に関する好意的評価は、Aグループの服装に対してだけでなく、A~Dの服装スタイル全体の印象の持ち方に共通している傾向であり、どの服装スタイルに対しても、他の年齢層に比べ、比較的頼りになると思う割合が高かった。

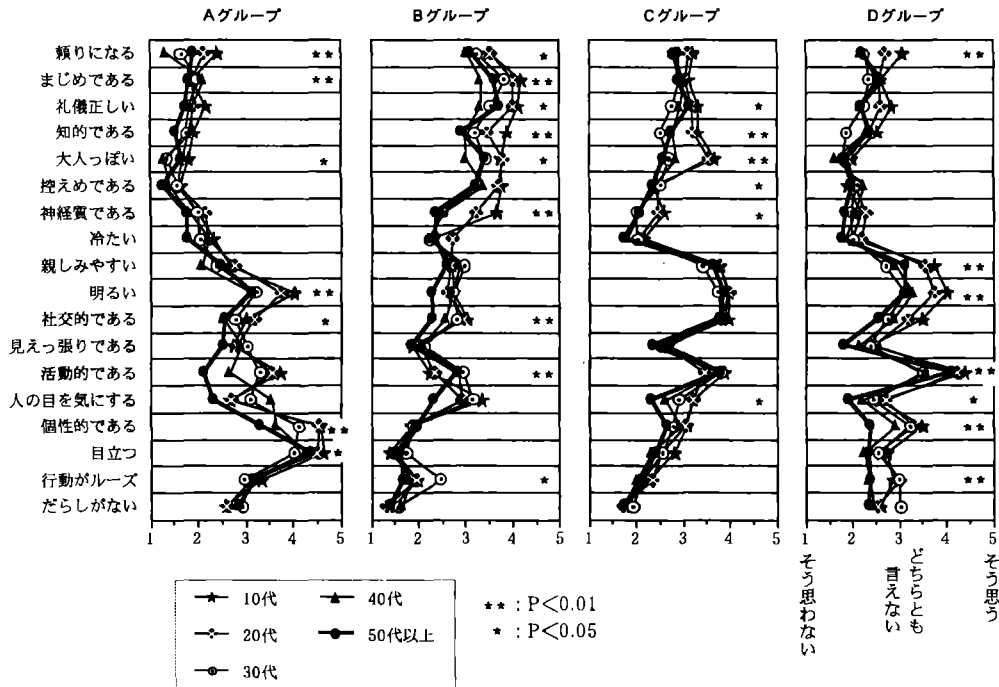


図4 年代別服装イメージ

Bグループの服装に対しては、まじめで知的であるとプラスの評価をする一方、神経質であると感じていた。Cグループの服装に対しては、20代以下の人は知的で大人っぽいと感じる度合いが強い。全体として、年代が若い方が好意的評価が目立つ。このように年代に違いによって服装スタイルから受ける印象は大きく異なり、多くの項目で有意な差が認められた。

一方、大井ら<sup>7)</sup>は、ファッションのイメージや受容性を調査し、年齢差が認められなかった、と報告している。この結果については、提示したファッションを絞り込みすぎたと分析しているが、同時に行った服装嗜好調査では、日常着用している服装のアイテム、色系統などにも年齢差があまり認められないと報告している。大井らの調査結果のように服装嗜好が年齢によってあまり変化しないとすると、上記結果は、服装嗜好の影響は小さく、年齢要因が強く反映した結果と解釈できる。

次に、価値観を含めた生活スタイルの違いにより、服装スタイルに抱く印象の違いがあるか否か、検討する。

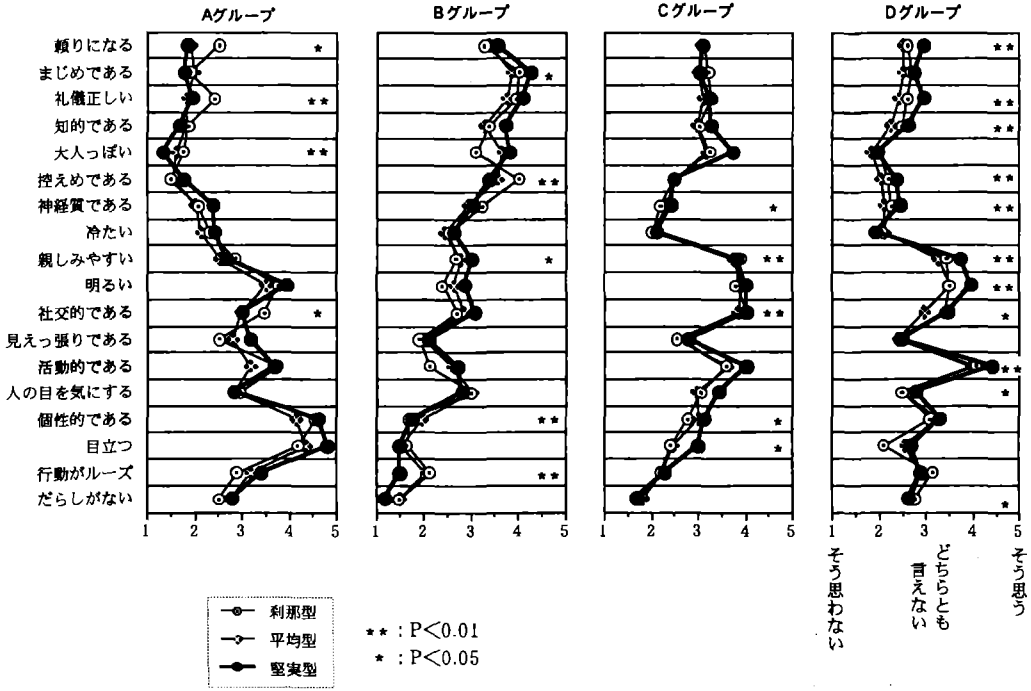


図5 生活スタイル別服装イメージ

Aグループの服装のように、個性的で目立つがだらしなく、行動がルーズで見えっ張りなど、マイナスの評価を受けているようなスタイルに対して、利那型の生活スタイルの人は好意的な見方をしている。また、堅実型の方は、Aグループ以外の服装に対しては比較的好印象を抱く傾向があるが、特に、だらしなさそうだが活動的な印象を与えているDグループの服装には他の生活スタイルの人より好印象を抱いていることがわかった。

さらに、性別で服装スタイルから受ける印象に違いがあるか否かを検討したが、ほとんど相違はみられなかった。

服装スタイルから受ける印象への影響要因として、性、年代、生活スタイルのいずれが大なのかを数量化I類で検討した。服装スタイルの評価に差があったA、Dグループの「頼りになる」項目についての検討結果を表2に示したが、年齢の影響が最も大きかった。他の項目についても、同様傾向であった。

次にピアスをした男性に対してどのように考えるか質問し、結果を図6に示した(複数回答)。塗りつぶし、又はドット模様は、肯定意見、斜線模様は否定意見であるが、全体でみると両者ほぼ同様傾向を示すものの、性別では女性の方がやや肯定的傾向が強かった。生活スタイル別で見ると利那型生活スタイルの人に肯定意見が多く、次いで平均型、堅実型の順であった。また、年



代別にみると年齢が若い方が男性のピアスを肯定する傾向が強いことがわかった。

表2 「頼りになる」評価に対する影響度

項目	Aグループ服装	Dグループ服装
	レンジ	レンジ
年齢	1.08681	0.79810
生活スタイル	0.70530	0.37856
性	0.31135	0.04547

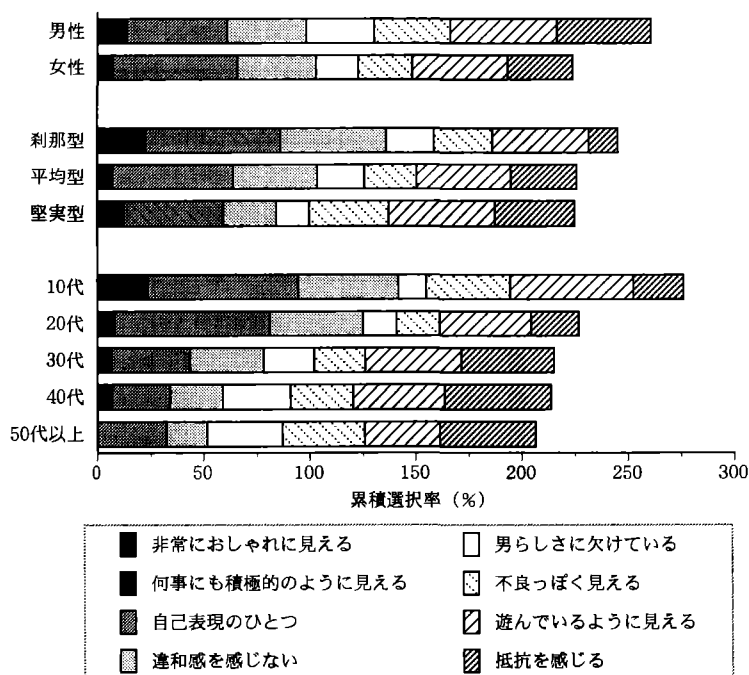


図6 ビアスをした男性に対する印象

性別、年代別、生活スタイル別に各選択項目を選ぶか否かについて、 $X^2$ -検定を行った。生活スタイル別では有意な差はみられなかったが、性別では「男っぽさに欠けている」( $P < 0.05$ )、「抵抗を感じる」( $P < 0.05$ )の2項目で差があり、また、年代別では「自己表現の一つ」( $P < 0.01$ )、「違和感を感じない」( $P < 0.05$ )、「男っぽさに欠けている」( $P < 0.05$ )、「抵抗を感じる」( $P < 0.01$ )の4項目で、有意な差がみられた。

図7、女性社員の制服と男性のピアスに対する考え方の相関を示す。分類軸に示す2項目は銀行やディーラー等における制服姿の女性社員に対する考え方を問う質問(複数回答)の中、ジェンダーに関係する項目2つを示す。そして、これら項目を選択している人とそうでない人で男性のピアス観に相違があるか否か検討した。「女性だけに制服着用を義務づけるのは男女差別

だと思う」を選んだ人、また、逆に「制服姿の女性より、男性の方が仕事ができそうなので頼りにすると思う」を選ばない人は、ピアスをした男性に対する見方も好意的で、価値観も柔軟であることがわかった。また、「女性だけに制服着用を義務づけるのは男女差別だと思う」人とそうでない人では、ピアス観の「自己表現のひとつ」「違和感を感じない」「ピアスに抵抗を感じる」項目を選ぶか否かで、それぞれ有意水準0.01で有意な差があった。同様に、「制服姿の女性より、男性の方が仕事ができそうなので頼りにすると思う」項目においても「ピアスに抵抗を感じる」「遊んでいるように見える」の選択割合に、有意水準0.01で有意な差が認められた。

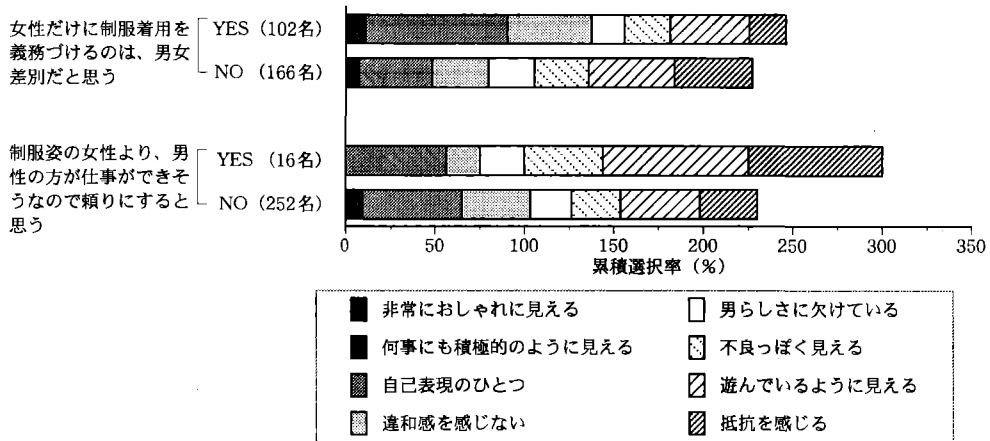


図7 女性会社員の制服着用に対する考え方とピアスをした男性に対する印象

また、女性だけに制服着用を義務づけるのは男女差別だと考え、かつ、男性の方が仕事ができそうなので頼りにするという考えについて否定的な人は、「頼りにならない」イメージが強い A グループの服装スタイルに対しても「頼りにならない」を肯定する割合が、有意に低い ( $P < 0.05$ )。さらに、A グループの服装スタイルの印象に関する18の質問のうち、15の質問に対して「服装だけでは判断できない」を選ぶ割合も高く、外見に左右されない考え方を示している。

以上のことから、多くの方は、服装など外見で性格をはじめ、着用者の内面までを推察しているが、その評価に最も影響を及ぼしているのが観察者の年齢要因であることがわかった。また、外見だけでは性格まで推察できないと考える人もいるが、このような傾向が強いのは、堅実型スタイルの人やジェンダーにとらわれない考え方の人であることがわかった。服装は他人に不快感を与えないかぎり自由であるべきであり、また、服装により不利益を被るようなことがあってはならないものである。自己表現を大切に、それぞれの自由を尊重する気持ちを育てることは非常に重要なことであるが、一方、相手に好感を与える服装とはどういうものかを学ぶことも求められていると考える。

#### 4 まとめ

服装が発する非言語情報の人々はどのように受け取るのかを群馬県、埼玉県在住の19歳以上の学生および社会人275名を対象にアンケート調査し、性別、年代別、生活スタイル別等で検討し、以下の結果を得た。

- 1) 4つの服装スタイルを提示し、着装者の印象を尋ねたところ、「服装だけでは判断できない」と答えた人は、全体で13.7%であり、多くの人は外見で着装者の性格等を判断できると考えている。また、堅実型の人の場合は、刹那型の人より外観で内面などを判断することが少ないことがわかった。
- 2) 提示した服装スタイルに対して、若い人の方が比較的好印象を抱く場合が多く、特に「頼りになる」「まじめである」など、人間として本質的な評価項目に対して、その差が大きい。印象のもちようは年齢の影響が大きく、次いで生活スタイルの影響が大きく、性別による差は小さいことがわかった。
- 3) ピアスをした男性を「自己表現の一つ」「違和感を感じない」など容認するのは、年齢でみると若い人ほど、また、生活スタイル別でみると刹那型生活スタイル傾向が強い人ほど、その割合が高い。また、ジェンダーにとらわれない考え方の人は男性がピアスをするを容認する傾向が強く、また、外見に左右されない考え方をする。
- 4) 以上のことより、被服が非言語情報として果たす割合は大きく、多様化の時代と言われつつも、服装スタイルなどで相手を判断する姿勢に大きな変化はないことがわかった。

本研究は群馬大学平成10年度卒業生、根元志津さんの協力のもとに行われたものであり、感謝する。

#### 引用文献

- 1) 朝日新聞：男性社員のピアス はずしたら評価が一変、1998. 4. 8
- 2) 朝日新聞：制服を脱ぐ女性、1985. 7. 15
- 3) 堀内雅子：家庭科教育71、(8)、11 (1997)
- 4) 川本栄子、渡辺澄子、黒田喜久枝、中澤乃智子、中川早苗：繊維機械学会誌、45、T207 (1992)
- 5) 杉山真理、小林茂雄：繊維機械学会誌、45、T229 (1992)
- 6) 川本栄子、渡辺澄子、中川早苗：松阪女子短期大学論叢30、77 (1992)
- 7) 大井久美子、筋野淑子：文化女子大学研究紀要、23集、61 (1992)